

# Niigata University

2011年卒業記念号

No.178

## 新大広報

特集

ふるさと

### 学びの故郷を 旅立ち新たな道へ

学長からのメッセージ

CAMPUS INFORMATION

第59回  
卒業修了制作展

卒業生重大(10大)以上News  
Photo Memory



新潟大学

# message

平成23年の春に新潟大学を卒業される皆さん、  
大学院を修了される皆さん、  
ならびに新潟大学を退任・退職される皆さまに、  
心からのお祝いを申し上げます。



新潟大学長  
下 條 文 武  
GEJYO Fumitake

## 卒業、大学院修了を祝して

今年も、本学から前途有為な卒業生ならびに大学院修了生を送り出すことができますことを、私たちは大きな喜びとし、誇りに思います。皆さんにとって、本学を卒業、修了されることは、人生における大きな区切りとなるものです。本学での学生生活を振り返りつつ、皆さんがどのように成長したのか、じっくり思い起こして下さい。これからの皆さんには、将来への夢や希望と共に、不安もあるかと思えます。新潟大学で学んだからこそ得ることができた貴重な体験や経験をエネルギーとして、志を高く、あらゆることに体当たりで挑戦してほしいと願っています。

今年も、本学から前途有為な卒業生ならびに大学院修了生を送り出すことができますことを、私たちは大きな喜びとし、誇りに思います。皆さんにとって、本学を卒業、修了されることは、人生における大きな区切りとなるものです。本学での学生生活を振り返りつつ、皆さんがどのように成長したのか、じっくり思い起こして下さい。これからの皆さんには、将来への夢や希望と共に、不安もあるかと思えます。新潟大学で学んだからこそ得ることができた貴重な体験や経験をエネルギーとして、志を高く、あらゆることに体当たりで挑戦してほしいと願っています。

今年も、21世紀に入ったの10年が過ぎ、次の10年の幕開けという、しっかりとした一步を踏み出す年に当たります。まさに21世紀を担う皆さんの前には、世界的規模の異常気象、環境問題、エネルギー・食料問題、世界平和の維持、新興感染症、さらに高齢化問題等による将来への不安など、克服しなければならない多くの課題があります。皆さんには、これらの課題解決の担い手として、それぞれの分野で貢献してほしいと願います。皆さんの力によって、これまでにない新たな考え方、新たな仕組み、新たな価値の創造が期待されています。このように皆さんには、多くの可能性が与えられています。何より大切なことはあくまで「自分との約束」を守り、常に学ぼうとする努力を心掛け、実行することだと思います。皆さんの前途に幸多かれと祈念しています。

5年前(平成18年4月)に、新潟大学の発展と会員相互の親睦を目的として、全学同窓会が結成され、現在活発な活動が行われております。昨年3月に完成した、五十嵐キャンパスの新たな玄関口に設置された大学銘板は、全学同窓会から寄贈いただきました。この「新しい正門」周辺が在学生とともに卒業生や本学関係者からも、新たな“シンボル・顔”として永く愛着を持って欲しいと思っています。さらに、昨年10月には本学初の海外同窓会として、中国同窓会が発足しました。今後、全学同窓会との連携のもと、海外同窓生の輪が広がることを願っています。

卒業・退職される皆様方には、様々な機会に本学を訪れていただきたいと思います。新潟大学は、皆様にとりまして心のふるさと(故郷)として、いつでも、扉を開いて、歓迎いたします。

## 学長からのメッセージ



## 退任・退職を祝して

退任・退職される教職員の皆様には、永年にわたり本学に勤められ、それぞれのお立場にて、献身的にご尽力いただきました。心からの敬意と感謝の意を表するとともに、めでたく退任・退職されますことに、お祝いを申し上げます。

近年の国立大学をめぐる環境は、激動の嵐の時代であるといえます。特に、7年前の法人化移行等、数々の困難な課題が立ちふさがってきましたが、皆様の絶大なご協力を頂きまして、国立大学法人新潟大学は着実な発展をみております。国立大学を取り巻く環境は変わらず厳しい状況が続いておりますが、新潟大学は、その使命である教育・研究・社会貢献活動の一層の充実と高度化に努め、世界に存在感を発揮する大学を目指してまいります。皆様におかれましては、これからも本学に対する変わらぬお力添えとご支援の程を宜しくお願い申し上げます。

最後に、この度人生の区切りを迎え、新たに出発される皆様方のご健勝とご発展を祈念申し上げまして、送別の辞といたします。



※写真は、平成22年春に整備された新正門と銘板です。

卒業・修了する学生

- page ▼ 人文学部
- 04 大橋 麻由  
教育人間科学部
- 菅原 詩織  
法学部
- 05 小原 実里  
経済学部
- 金澤 豊  
理学部
- 06 仲條 詩織  
医学部
- 峠 弘治  
医学部
- 07 皆川 美和  
歯学部
- 滝沢 雅子  
工学部
- 08 竹内 那央人  
農学部
- 小池 勇樹  
大学院 教育学研究科
- 09 高桑 美奈  
大学院 保健学研究科
- 千葉 映奈  
大学院 現代社会文化研究科
- 10 阿部 隆  
大学院 自然科学研究科
- 齋藤 眞朋  
大学院 医歯学総合研究科
- 11 鈴木 貴子  
大学院 技術経営研究科
- 武藤 浩二

# message

ふるさと

## 学びの故郷を 旅立ち新たな道へ

～ 母校への感謝 友との絆～

### 人文学部

## 大学には残るけれど…

行動科学課程 | 大橋 麻由 OHASHI Mayu



学科の友人と一緒に新大祭にて。  
本人は一番左。

大学生活を振り返ってみると本当に4年間とは短いものだったと実感します。4年間続けたアルバイト、成人式の実行委員、学科や仲のいい友人との旅行や飲み会、新大祭、インターンシップ、教育実習、就職活動。時には辛くてやめたくなくなったり泣いてしまったりした時もありましたが、こうして終わってみるとどれもいい思い出です。でも、今こうしてよかったと思えるのは、私を支えてくれた友人・先輩・先生方がいてくださったからです。特に、心理学のみんなどはPS(プロジェクトスペース)で過ごす時間も多く、その分みんなで励ましあって頑張ることができました。だから、私はみんなとこの新潟大学で出会えたことにとっても感謝しています。私は春から新潟大学職員として大学には残りますが、私がみんなと出会って充実した学生生活を送れたように、未来の大学生が新潟大学で素晴らしい大学生活が送れるように精いっぱい頑張っていきます。

### 教育 人間科学部

## 卒業にあたって

学校教育課程 | 菅原 詩織 SUGAWARA Shiori



3年次、臨湖実習で生物科の仲間と一緒に。  
本人は左から3番目。

大学生活を振り返ると、教育実習やボランティア、部活、研究、そして教員採用試験と盛りだくさんの4年間で、充実していて楽しい学生生活だった。そんな簡単な言葉で4年間を表せてしまうが、そのように思えることは大切なことだなと感じている。

私の大学生活の中には、たくさんの友達がいって、一緒につらいことを乗り越えたり、感動したり、喜んだりした思い出や、授業や実習などで新たな発見ができ、わずかであるが教員に近づけたという達成感、研究で興味のあることを深められた満足感など、たくさんの思いが詰まっている。私にとって学校はすてきな思い出があるとても大事な場所であり、それに気づかせてくれた私の周りには友達、先輩、後輩、教授に本当に感謝したい。

来年度からは小学校の先生として多くの子どもと向き合うことになる。私が学校を楽しんでいることができたように、子どもたちにとって学校を楽しめる場所になれるような先生になりたい。

法学部

## 新潟大学を卒業するにあたっての思い

法学科 | 小原 実里 OBARA Misato



ゼミの仲間・南教授と一緒に。  
本人は最前列右から3番目。

振り返ればあっという間の4年間でしたが、非常に楽しく充実した大学生活を送ることができました。このように思えるのは、偏に仲間のおかげです。切磋琢磨し合え、真面目な話も他愛もない話もできる仲間と共に過ごした時間は、何物にも代え難い私の大切な思い出です。進む道はそれぞれ違いますが、いつかまたみんなで成長した姿で語り合える日が来ることを楽しみにしています。そして、いつも温かく見守ってくれた家族、親身にご指導して下さいました先生方、多くの方々の支えと励ましがあったからこそ、今の自分がいるのだと強く感じています。この場を借りて、お世話になった方々に心から御礼申し上げます。

春からは新潟を離れ、社会人として新たなスタートを切ります。新潟を離れるのは寂しいですが、大学生活で得た知識と経験を糧にして、思いやりの心と感謝の気持ちを忘れずに、一步一步誠実に歩み、地域社会に貢献できるよう努めていきたいと思います。

理学部

## 卒業するにあたって

生物学科 | 仲條 詩織 NAKAJO Shiori



研究室の恩師と仲間と。  
本人は右から2番目。

期待に胸を膨らませ、地元を離れて過ごした大学生活は、本当にあっという間に過ぎようとしています。

この4年間、学業面では講義・学生実習・卒業研究で多くの理学の知識を学びました。また、アルバイトや就職活動を通じて社会に出る上で重要になる社会の仕組みや人との繋がりを、身を持って体験することが出来ました。また、ウィンタースポーツに挑戦したり、様々な所に旅行したりと楽しい思い出もできました。このように充実した大学生活を送ることが出来たのは、ご指導して下さいました先生方、様々な経験を通して知り合った友達、学科の仲間、そして何より私を支えてくれた両親がいてくれたからこそであり、感謝の気持ちでいっぱいです。

いよいよ卒業という節目を迎え、今春から社会人として働くこととなりますが、これまでの経験を活かし、新しいことを吸収して、今の自分より何倍も成長した自分になれるように努力していきたいです。

経済学部

## 卒業するにあたって

経営学科 | 金澤 豊 KANAZAWA Yutaka



ゼミ合宿。  
本人は最前列の左から3番目。

新潟大学での4年間は毎日が楽しく充実していて、とても早く過ぎていったように感じます。そして、ゼミやアルバイトなどの様々な活動を通して知識や経験を得ることができ、自分を成長させることができたと思います。

ゼミでは地方公共団体の施策について勉強しました。各地方公共団体のおかれている財政状態や地域の環境が異なり、改革や施策を進めていくことがいかに難しいかを知ることができました。また、私のゼミは公務員志望のゼミ生が多く、公務員試験の学習会を行い同じ目標に向かって切磋琢磨することができ、高い意識を持って勉強することができました。

大学生活全体を通して様々な人に出会えたことは私にとって大きな財産であり、今充実していたと感じられる源です。4年間でいくつもの出会いを経験することで、私の視野や価値観を広げ自分を成長させることができたと思います。出会えた皆さんに本当に感謝しています。ありがとうございました。

医学部

## 新潟大学を卒業するにあたっての思い

医学科 | 峠 弘治 TOUGE Kouji



部活の仲間たちと。  
本人は後列左から2番目

右も左もわからぬまま入学式を終え、待っていたのは部活勧誘という医学部のイベント。めまぐるしく部活紹介がされ、あつけにとられながらも、楽しそうな雰囲気ラグビー部を選択。浪人時代に肥えに肥えた体は見ると引き締まった。スーパーボディを求めるあなたにお勧め、ラグビーダイエット。

冗談はさておき、大学生活の6年間の中で、一番多くの時間を共有したのは、やはり部活の仲間です。北は北海道から西は大阪まで遠征や温泉旅行、スキー旅行、ボーリング大会、練習、そして、飲み会、飲み会、飲み会。いろいろとありました。共に笑い、泣き、喜び、苦しい時には励ましあい、助け合い、時には怒ることもあったけれど、振り返ればいい経験であり、良き思い出です。

4月から医師として働くことに不安を感じていますが、たとえどんな困難であろうと、one for all の精神で突き進むつもりです。「社会の荒波、ドンと来い。」

医学部

卒業するにあたって

保健学科 | 皆川 美和 MINAGAWA Miwa



学校でクラスの子と。本人は左側。

もう卒業すると思うと、本当にあっという間の4年間でした。この4年間で、看護についてたくさんのことを学び、自分自身とても成長することができたと思います。

もちろん大学生活は、勉強だけでなくアルバイトや友人と過ごした時間など、とても充実した日々となりました。サークルには入っていませんでしたが、たくさんの友人と楽しい時間を過ごすことができ、かけがえのない4年間になりました。

1年次は、五十嵐キャンパスで他学部の友人と交流を深めることができ、2年次から4年次は、旭町キャンパスで同じ目標を持つ看護の友人と、授業や実習でお互い励ましあいながらも共に成長することができました。

卒業という節目を迎えるにあたり、温かく見守ってくれた家族、励ましあいながら共に過ごしてきた友人、指導してくださった先生方に感謝の気持ちを忘れずに、卒業後も立派な看護師になれるよう日々精進していきたいと思っています。

工学部

新潟大学を卒業するにあたって

機械システム工学科 | 竹内 那央人 TAKEUCHI Naoto



研究室の仲間と一緒に。本人は後列左から3番目。

入学する前は、大学の4年間という時間をとても長いものだと思っていました。今、こうして卒業を目前に控えて自分の大学生生活を振り返ってみると、学業をはじめ、サークル活動やアルバイト、就職活動など様々なことを経験し、そのたび成長できたと思います。

サークル活動とアルバイトでは、年齢や考え方の全く違う人達とともに1つの目標に向かって協力することの重要性を学び、就職活動では様々な人と出会い、時に競い、時に励まし合いながら切磋琢磨することを学びました。また、これらの活動や初めての一人暮らしの経験から、自分が家族、大学の友人、先輩や周囲の人達に支えられていることを改めて実感し、支えてくれた人達に心から感謝しています。

長いと思っていた4年間も、もうすぐ終わろうとしています。今となってはとても短く感じ、名残惜しい気持ちもありますが、大学生活で得た知識や経験を活かし、社会人として仕事に取り組んでいきたいです。

歯学部

卒業

口腔生命福祉学科 | 滝沢 雅子 TAKIZAWA Masako



2年次の実習での学科集合写真。本人は前列中央。

私にとって大学生活は、今まで過ごしてきた中で一番早い4年間でした。中でも最も印象に残っているのは、4年次の臨床実習です。1, 2週間ごとに科が変わり、異なる環境の中での実習は緊張の連続でしたが、各科で様々な歯科診療、患者さんへの対応を学ぶことができました。特に、当学科の先生、学生が中心となって診療を行うお口の健康室では、検査、歯磨き指導、クリーニングといった一連の流れを学ぶとともに、患者さんと一対一で接することで、どうすれば分かりやすく説明できるのか、どう接すれば患者さんに気持ちよく帰っていただけるか、などを考えながら実際の対応法も学ぶことができました。また、1年間の実習を乗り切れたのは、実習の辛さ、楽しさを分かち合えた仲間がいたからだと思います。この4年間で学んだことを、これからの経験に生かし、さらに成長できるように頑張りたいです。

農学部

卒業するにあたって

生産環境科学科 | 小池 勇樹 KOIKE Yuki



学科の仲間と一緒に。本人は左から2番目(下側)。

大学生活4年間は本当にあっという間で、充実していました。特に印象に残っているのは学科での思い出です。

2年次のコース選択では、野外実習が多いことが特徴である森林管理科学科コースを選択しました。特に3年次の夏休みには2~3週間佐渡に滞在し実習を行いました。暑い中、雨の中、足場の悪い斜面での測量実習は本当に大変でした。しかし、そんな大変な実習も学科の気の知れた仲間と一緒にこなすことで楽しくもなりました。

私の学年は学科全体で仲がよく、テスト前にみんなで勉強したり、みんなと飲みみにいたり授業以外でもほとんど学科のみんなと過ごしていました。この学科の仲間達だったからこそ、つらい実習もこなせたと大学生活が楽しくなったのだと思います。

大学を卒業しますが、友達、先生、研究室の方々、お世話になった皆様には本当に感謝しています。

特に4年間自分の好きなようにさせてもらった両親には本当にありがとうございます。

大学院

## 修了にあたって

教育学研究科 | 高桑 美奈 TAKAKUWA Mina



サイエンスセミナーで活動したメンバーと。本人は前列右端。

私は、大学院の2年間で自らの成長に繋がる多くの経験をする事ができました。学部4年次の時から続けている生態学の研究では、積み上げてきたデータを基に新しい発見や面白さを見つけ、生物の不思議に迫ることができました。

また教職を志望していた私にとって、女性大学院生による中高生の進路選択支援活動(サイエンスセミナー)に参加できたことは、大変貴重な経験でした。出前授業で、大学や研究のことを中高生に分かりやすく伝える活動をしたことで、教師になりたいという思いがより一層強くなりました。

大学院での様々な経験を通して、実際に自らの目で観察することで新たな発見や考えが生まれることの大切さを感じました。考えたことをとにかくやってみることが大切で、そこから次に進む新たな発見があることに改めて気付きました。今まで学んできたことを胸に、好奇心と探究心をもち続けながら、4月から教員として新たな一歩を踏み出したいと思えます。

大学院

## 新潟大学を修了するにあたっての思い

現代社会文化研究科(博士後期課程) | 阿部 隆 ABE Takashi



現社研で学んだ国も年齢も違う学友たちと。本人は左から2番目。

50を迎える前に、今迄に自分を褒めることがあったか自問自答し、答えが出ない自分を奮い立たせ法学部(夜間主)に挑戦しました。先輩や同世代、若人と年代が異なる同期生と4年間、苦しみ楽しみながら学びました。卒業の日、なにか物足りなさや燃焼していない自分があり、大学院の門を叩き進学をしました。

研究テーマは私の現職である金融で、明治5年に国立銀行条例が公布され翌年から12年にかけて誕生した153の国立銀行を対象としました。修士、博士課程と研究を続けてきましたが、指導教官の藤井先生や谷、菅原両先生には大変お世話になりました。

院生や学部生に、仕事と学業の配分はと聞かれ、いつも仕事は100%以上、研究も100%以上と答え、その実現に努力をしてきました。

今まで夢でもあった、知的生活を思う存分経験しましたが、研究生生活はこれからも続けていきたいと思っています。

いま勝利の像の前で大きく背伸びをして、自分に御苦労さん。

大学院

## 卒業、そして未来へ

保健学研究科(博士後期課程) | 千葉 映奈 CHIBA Akina



「女性サイエンスセミナー」での三宅先生送別会。右端が本人。

私は今春、9年間に及ぶ学生生活を終える。途中、この長い年月を学業に費やすことに迷いが生じることもあった。しかし今振り返れば、目標をもって進んできた9年間に悔いは無い。何より、今回の卒業は自力だけでは到底為し得なかった。両親、先生、友人など周囲の支えがあったからこそで、心から感謝している。本当に、本当にありがとうございました!

卒業後はいよいよ新潟を出て、新たな身分と環境の中で研究に奮闘する。今までよりもさらに厳しい日々になることを覚悟している。不安なことも相当多いが、恐れるよりもまずは楽しんで様々なことに挑戦し、たくさんの経験を積みたい。そして夢に向かって着実に進んでいきたいと考えている。今回の卒業は言ってみれば、未来にある私の目標までの道のりの通過点でしかない。しかし、大きな通過点だ。これを機に新たな気持ちで、そして、この9年間の新潟大学での学生生活を糧にし、未来へ歩いていきたいと思う。

大学院

## 新潟大学を修了するにあたっての思い

自然科学研究科(博士前期課程) | 齋藤 眞朋 SAITO Masatomo



電波望遠鏡を背景にして。本人は右から2番目。

充実してた!最近では修士論文を書いていてバタバタしていましたが、少し手を止めて振り返ってみたらそんな思いがこみ上げてきました。それは自分にとって大切なことを、しっかりとやってこれたからだと思います。

学部生の時は勉強と部活に明け暮れていた毎日でした。大学院に入ってから、研究が大きなウエイトを占めるようになります。それまでも増して、主体的に学ぶことが要求され、勉強する内容も難しくなりました。そのため院の2年間は、自分の生活のバランスを崩さずに、しっかりと研究を進められるようにするための試行錯誤の繰り返しだった気がします。でもそれを通して、研究をして頭を鍛えたり、自分自身について深く考えたりすることが出来たので、とても満足しています。

これからは新潟大学で培ってきたものを活かして、色んなことにチャレンジして、思いっきり人生を謳歌していきたいと思っています!

大学院

## 感謝を込めて

医歯学総合研究科(修士課程) | 鈴木 貴子 SUZUKI Takako



お世話になった先生と。新潟の父になりました。

チャレンジに失敗はつき物、といいますが、目指すものに近づくために選択した大学院の道で私はそれを一つ経験しました。人それぞれに挫折や失敗の経験はあると思いますが、私にとってそれは、何もできない、ということでした。目の前にやることはあるのに、考えだけが膨らんでひたすらに悩む毎日。これから社会に出るのに私は何をしているのだろう…成果主義だった私にとっては苦しい時期でした。しかし、この経験によって私は大きいものを得ました。それは、「素直になること」。私の基盤になると思います。また、大切な出会いがたくさんありました。チャレンジはやっぱり悪くない、そう思います。

自由でたくさんの選択を与えてくれる大学・大学院時代。自分が行うことは自分を作るもの。貴重な時間だと思えます。この時代を与えてくれた家族、新潟でお世話になった方々、そして美しく温かい大好きな新潟の地に感謝します。ありがとうございました。

# message

ふるさと

## 学びの故郷を 旅立ち新たな道へ

～ 情熱と希望を未来に託して～

### 退任する教員

- 12 人文社会・教育科学系(人文学部)教授 高橋 正平
- 人文社会・教育科学系(教育学部)教授 近藤 フチエ
- 13 人文社会・教育科学系(教育学部)教授 田村 裕
- 人文社会・教育科学系(教育学部)教授 常木 正則
- 14 自然科学系(理学部)教授 立石 雅昭
- 自然科学系(工学部)教授 宮崎 正弘
- 15 自然科学系(大学院自然科学研究科)教授 澤田 清
- 自然科学系(大学院自然科学研究科)教授 堀 秀隆
- 16 医歯学系(大学院医歯学総合研究科)教授 追手 巍

大学院

## 新潟大学を修了するにあたっての思い

技術経営研究科 | 武藤 浩二 MUTO Hiroji



演習中、教員のアドバイスに耳を傾ける。

入学当初の目標は「意思決定力」を養うというものでした。この「意思決定」とは「特定の目標を達成するためある状況において複数の代替案から最善の解を求めようとする行為である」とされています。ビジネスの世界ではあらゆる場面で自律的に判断し適用していく必要に迫られます。またここには唯一無二の答えなどありません。理想は求めますが、事によっては最善策よりも次善の策が正解という場合もあります。拘るが囚われないことが重要であり、最後は自分で答えを出すことなのです。多くの先生や外部講師の方からもご指導を頂き、また一緒に机を並べて意見交換した同級生からも多くの知見を得ました。この体験は理論を通して現実を見て、現実のよりよい理解につながっていくと思います。これからの厳しい時代を生き抜くためにも、勉強する習慣は続けます。最後にMOT(技術経営研究科)で学ぶという私の意思決定は、振り返ってみると最善の解であったなと思います。

## 新潟大学を退任するにあたって

人文社会・教育科学系(人文学部)教授 | 高橋 正平 TAKAHASHI Shohei



私の新潟大学での教員生活は昭和57年4月の旧教養部赴任から始まった。当時は大学進学者が200万人を越える時代で、教養部英語科も入学者増に伴い、4人採用となり、私もそのうちの一人であった。教養部時代は学生の指導もなく、専門課程に行く1,2年生に専門とは関係のない英語を教えるだけであった。当時は「読む英語」が主で、「話す英語」はあまりなかった。当時の英語の同僚とは毎年スキーに行った。そのスキーは今なお続いている。平成6年4月教養部解体と共に私は法学部へ移った。法学部時代は教養部時代の延長のようなところがあり、私の専門の出る幕はあまりなかったが、研究環境は教養部時代以上だった。当時法学部は教員数が60人位で、学部の運営に我々教養部から移った教員が関わることはほとんどなかった。学部の雑務もない、学生も来ることもない、で思う存分研究に専念できたことは非常にありがたかった。平成14年4月からは人文学部に移ることになった。英文学専門の私が本当に英

文学を教えることになったのは人文学部であり、その意味で最後の職場となった人文学部は非常に思い出深い。振り返れば新潟大学では29年間を過ごしたことになる。3つの職場で出会った多くの教職員の方々にこの場を借りて感謝の念を表したい。



元教養部外国人教師 A. コーエン氏送別会にて。

## 長いことお世話になりました

人文社会・教育科学系(教育学部)教授 | 近藤 フヂエ KONDO Fujie



昭和48年4月新潟大学高田分校に赴任して以来、38年間新潟大学にお世話になりました。着任当初、学生紛争の名残があり、講義というより課外時間に学生と過ごす時間が多かったように思います。自然豊かな高田では、冬はスキー、夏は水泳というように様々なスポーツを楽しんだり、歴史的な街の風情を訪ねて散策を楽しんだりしました。当時東京まで特急で4時間かかり、研究条件が極端に悪くなったと感じたものでした。今思えば情報通信の進歩はまさに隔世の感があります。その後五十嵐地区への教育学部の統合、教育学部の改組、特に芸術系教科の新課程新設など、10年単位での組織の見直しに翻弄されて来ました。時代の変化に学部も対応せざるを得ませんでした。

研究面でも、芸術動向に連動して、美術史も著しく変化しました。特に様式史から、記号論や図像解釈学など、作品解釈が主流となる傾向がありました。作品を取り巻く多様な史実とあわせて解釈することで、特定のジャンルからアートという大きな枠で考えるようにな

りました。教育課程もより社会の実態に対応するように改善されました。研究・教育でも、時代と共に変化する部分と時代を超えた芸術的価値の両面を配慮する必要を感じました。長い大学生活で得た貴重な経験を活かして、新しいことにも取り組んでいきたいと思っています。



2010年8月、美術科の学生と流しそうめん。

## 新潟大学を去るにあたって

人文社会・教育科学系(教育学部)教授 | 田村 裕 TAMURA Yasushi



母校の大学で4年余、助手として勤務後、1977年4月に新潟大学教育学部に着任しました。それまで、文学部において、瀬戸内海地域を主たるフィールドとして日本中世史研究を進めてきたものですから、新潟大学において、教員を目指す学生諸君とどのように相対するのか、いささか戸惑いを覚えたことが懐かしく思い出されます。

それから34年という長い時間が経過しましたが、この間、日本の社会も大学も、そして学生の気質も大きく変容しました。私の研究フィールドも越後・佐渡を主たるものに移りましたが、ゼミの学生諸君と共に文書を読解し、現地調査を行い、新たな歴史像を描く作業を進める一方、歴史教育について皆で考え、実践も試みました。

小・中・高等学校における多様な教育活動のなかにあって、自らも歴史研究を進めたいうえで、児童・生徒の歴史認識を育成し、人間としての成長を支援することの出来る教員をどのように育てるのかということが、私の大学における役割の一つとあってきましたが、それ

が充分には果たせなかったのではないかと案じています。昨春、教室の卒業生諸君を執筆の中心メンバーとして、『知っておきたい新潟県の歴史』(新潟日報事業社刊)を編纂し、初版3500部も完売に近づいているということが、一つの区切りとなりました。



ゼミ巡検。北海道・上富良野にて。

## 素晴らしい教育研究環境の中で

人文社会・教育科学系(教育学部)教授 | 常木 正則 TSUNEKI Masanori



眼下にサッカー場、スイカ畑、松林。その向こうに日本海。水平線、青い空、白い雲、和いだ海、大荒れの海。春夏秋冬、研究室からの日々変化する景観である。エレベーター脇のベランダからは、右に角田山、弥彦山、左は越後平野の向こうには五頭山、粟ヶ岳、守門岳の越後連山、演習室である国語科授業分析室からは飯豊連峰が展望できる。殊に陽光を受けた雪の飯豊連峰はさすがに美しい。夏の10日あまりの炎暑を除けば、こんなに素晴らしい環境の中で、28年余り教育研究に携わらせていただいた。ただただ感謝あるのみである。

私の研究分野は国語科教育学である。小・中学校国語科教育の実際を観察し分析考察を続ける中で、国語科教育理論の構築とそれに基づく教育に従事してきた。しかし、国語科教師の養成及び研修の教育課程と教育方法はまだまだ改善・改革の要がある。国語科教師教育の基礎となる国語科教育学の一層の進展は、今ある人

にそして後任の方に委ねよう。感謝の気持ちをいっぱい込めて、この得がたい教育研究環境に私は別れを告げる。



春恒例の角田山登山。

## 退職にあたって思うこと

自然科学系(理学部)教授 | 立石 雅昭 TATEISHI Masaaki



OD(オーバードクター)を経て、1979年、運良くここ新潟大学に職を得て、爾来32年の教員生活を3月に終えることになりました。ここまで何とか無事職務を全うできたのも、ひとえに、先輩・同僚、職員の方々の支え、そして、何より、多くの学生との共同があったからこそです。心から御礼を申し上げます。

地質学を専攻していることから、上越・中越地域を中心に県内各地の山地や丘陵を歩いてきました。30年の間にこれらの地域はだいぶ変容してきました。地形図に載っていた集落が戸残らず消えているところや、人声と耕耘機の音が聞こえていた沢奥で、次の春には途絶えたたんぼ。中山間地が疲弊し、荒地が広がってゆく一方で、中越地震での全村避難から力強く復興に動き出した山古志。こうした流れと動きを俯瞰する時、新潟大学がどこに流れ着くか不安を感じざるを得ません。法人化以降、日本における高等教育の現状に強い危機感を抱いてきた私としては、高等教育を担う大学人

が県民・国民の思いや要望を踏まえながら協力と共同の力で道を切り拓いていかれることを願っています。少し離れたところではありますが、これからも発信します。よろしくお願ひします。



1999年3月、宮城県北部堆積ゼミ巡検。



## 言葉のわかるコンピュータを目指して

自然科学系(工学部)教授 | 宮崎 正弘 MIYAZAKI Masahiro

私は1989年に新潟大学に着任以来、20数年にわたり、コンピュータで言葉を理解することを目指し、新しい統語・意味処理に基づく自然言語処理とその応用システムの研究を進めてきました。その結果、意味と整合性のある文構造を出力する日本語解析技術とそれを支える言語知識体系など高度な日本語解析のための基礎技術を確認することができました。このような研究成果を活用して自然言語処理応用システムの製品開発を行う新潟大学発ベンチャー企業、㈱ラングテック(本社・東京)を2006年5月に設立し、代表取締役社長を兼務しています。最近では、教授と社長の二足のわらじをはいて、言語理解に必要な知識を効率的かつ的確に検索できる連想型多次元センサーとそれをを用いた新しい意味処理の研究、高品質な日英機械翻訳の製品開発など幅広い活動に取り組んでいます。

本学を退任後は、社長業に専念し、人々に喜んで使ってもらえる機械翻訳、情報検索、日本語入出力などの各種応用システムの製品

開発、および生涯現役の心意気をもって言葉のわかるコンピュータを実現すべく、息の長い基礎研究にも取り組んでいきます。立場は違いますが、従来通り研究開発の第一線で活動していきますので、何か大学のお役に立てることがあれば協力させていただきたいと思っています。今後ともよろしくお祈りします。



研究室にて日本語解析の研究に取り組む。

## 新潟大学を退任するにあたって

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授 | 澤田 清 SAWADA Kiyoshi

1977年5月に赴任して以来、途中分子化学研究所への転出はあったものの、34年間お世話になりました。大学院のときの同期では大学の教員として残った方が多く、これらの方と情報交換したときに、新潟大学理学部へ赴任してきたことがいかに恵まれていたかを実感しました。赴任の年度内に精密級の装置を購入して頂き、手製ながら恒温室も措置して頂きました。次年度からは1年余りの米国への出張が許されました。米国での結晶成長の研究は今でも私の課題の1つとして続けています。特にこの研究ではX線回折、電子顕微鏡等、本業の溶液内反応とは全く異なった装置を必要としており、とても自力で措置できる機器ではありませんでした。これら以外の装置も含め、測定に便宜を図って頂きました。機器分析センターの機器も含め、今でもこのような借用は続いています。このような学部・学科の壁のない厚意は、以前に勤めていた大学では想像もできない環境でした。

私の本業は、分析・錯体化学および溶液化学であり、環境・地球化

学から物理化学まで化学の中でもかなり広い分野の学会に参加してきました。このため、IUPACの国際会議を含め新潟で多種の学会を開催し、そのたびに多くの先生方にお世話になりました。学内、学科内を問わず、測定・装置で支援頂いた先生方、また、学会・講演会等でお世話になった先生方に、この場を借りてお礼を申し上げます。新潟大学の教職員の皆様、またお付き合い頂いた学生の諸君に感謝とお礼を申し上げます。



溶液化学シンポジウム終了後スタッフの皆さんと。朱鷺メッセにて。

## 退官にあたって

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授 | 堀 秀隆 HORI Hidetaka

新潟大学自然系大学院自然科学研究科専任教授として新潟大学に赴任してから14年がたちました。在任中以下の課題に取り組みました。根こぶ病菌がアブラナ科植物の根に感染し病態を示す初期反応を生化学的に明らかにする事、細菌バシラス・スリンジェンシスの殺虫蛋白質の昆虫幼虫殺虫機構を分子レベルで解明する為に、昆虫中腸上皮細胞との相互作用を解明する事、微生物の有機物質化作用を利用し超高速で有機性廃棄物をリサイクルする事の3課題です。微生物と植物・昆虫との相互作用、微生物の資化能力の高度化に関する応用微生物学的研究で、いずれも、持続的発展可能な農業と社会を作る上で大切な微生物利用の可能性を明らかにしその使用法を示すものでした。他人の真似をしてはいけない、どんな小さい物でも自分の物と云える研究成果を創ろうと学生に教えてきたのですが、学生・院生と一所懸命に取り組み、3つの課題でささやかですがオリジナルなものを世に出すことができました。本

堀・西海班のスタディースキルズ実習。村松農場にて。

学の教育と研究が飛躍的に発展し、向学心に燃える高校生を受け入れ、時代閉塞を打ち破る事のできる、力強い学生と院生を創りだすインパクトのある教育が益々実践されることを願っています。



## 学窓を去るにあたって

大学院医歯学総合研究科(医)教授 | 追手 巍 OITE Takashi

私は昭和40(1965)年、新潟大学医学部医学科に入学した。クラブ活動として選んだのはラグビー部である。医学進学課程の2年間は医学部ラグビー部と同時に全学ラグビー部(部長:渋谷 武人文学部教授)に属し、スクラムハーフとしてレギュラーをしていた。全学ラグビー部は北関東大学リーグ戦では2年間とも優勝したが、瑞穂ラグビー場で開催される全国地区対抗大会への出場をかけた関東代表戦には1年生の時は国土館大学、2年生の時は成城大学と当たり、いずれも大敗した。現在の全学ラグビー部は既に定年退職された橋本 修教授の指導により大変強くなり、昨年は準優勝と地区対抗大会の常連校となっている。医学部ラグビー部は私が医学部教授、そしてラグビー部部長になった平成8(1996)年、東日本医科対抗大会で初優勝した(写真)。ラグビーはプレーヤーが1チーム15名という多人数で競う団体スポーツである。ラグビーでは“one for all, all for one”の名句があるように個々の能力、個性を生かしつつ、全体の総合力を高めること

1996年9月、ラグビー部東日本医科対抗大会初優勝祝賀会にて。

が重要である。現在、日本の大学は国公立を問わず、生き残りをかけて必死であり、全国の中堅どころに位置する新潟大学が発展し、高い評価を得てゆくには総論的、総花的な取り組みではおぼつかない。ラグビーにも共通する新潟大学ならではの特徴ある分野を中心とした全体作りが必要ではないだろうか。これまで46年間お世話になった我が母校、新潟大学へ感謝をしつつ、益々の発展を祈念したい。



## 「蓮華」

日本画

伊藤鈴夏

**制作意図** 私は今まで植物を描く事が多かったのですが、中でも蓮は3年の頃から描き続けてきたものなので、モチーフに選びました。蓮の花を見た時に感じた清廉なイメージ、大きな葉の間から覗く花の存在感を日本画で表現したいと思いました。

**苦労した点** 絵の具を混ぜ、何回も塗り重ねることで全体の雰囲気を作りました。特に花を綺麗に咲かせるために、慎重に色を選び丁寧に塗るよう心掛けました。



## 「うたたね」

日本画

清田千夏

**制作意図** 「生きる」ってどういうことなんだろうかと考えながら描きました。

野良猫の生きることへの執着心、したたかさやたくましさに憧れを感じます。また、野良猫のもつふてぶてしくも愛らしい表情が魅力的だと感じています。そして、猫を取り囲む植物たちは私が今まで植物を好んで描いてきた集大成の表現となっています。

**苦労した点** 変化に富んだ植物の色合いを岩絵の具の粒子の重なりの中で表現するのが大変でしたがそれが日本画の魅力であり面白さだと感じます。また、全体の雰囲気を整えていくのも大変時間がかかりました。



# 卒業修了 第五十九回 新潟大学 制作展

2011年2月2日から  
7日間、新潟県民会館  
3階アートギャラリーに  
て、大学院教育学研究科  
教科教育専攻美術教育  
専修の修了生と、教育人間科学部芸術環境創造課程造形表現コースと学校  
教育課程美術教育専修の卒業生により卒業修了制作展が開催されました。  
今年も多種多様で示唆に富んだ作品が数多く並びました。  
その一部ですが、ご紹介いたします。



## 「凜と咲く」

日本画

深井絵理香

**制作意図** あやめは日本画を専攻した2年生のときから毎年描いてきました。細い茎で大きな花を支えながら上へまっすぐ伸びるあやめ。その凛とした美しさ、強さに魅力を感じ制作しました。

**苦労した点** あやめの魅力を表現するため、特に構図と色に気を配りました。何度も色を塗り重ねることで、花や背景の色を作り出すことができました。

## 「誰が紡ぐもの」

現代アート

鈴木貴子

**制作意図** この作品はある人との出会いのなかで発想されたものです。その人のこれまでを辿るように糸が血となり肉となり、何色もの色で身体が構成されています。その場に居るだけで、ある家族の会話が聞こえてくるようです。

**苦労した点** ひたすら糸を巻くところですか。でも友人に借りた轆轤(ろくろ)や後輩の協力のお陰で効率よく、また本当に楽しく充実した時間とともに制作することができました。コマウオ!





現代アート 「時間の記憶」  
母 貝 旋

**制作意図** ●新潟に来たばかりの時に、美しい海を初めて目の当たりにして、すごく感動させられました。スーパーに行って海鮮のコーナーを覗くと、豊かな海鮮物が売っていて、大きなこは特に目立っていました。私の作品はこの足を中心として海に感謝する気持ちを表現しているとともに、日本で感じたものと微妙な気持ちとを融合し、具象と想像の世界の組み合わせでできた、不思議で、新鮮な自分の意識的な世界を表現したものです。  
**苦勞した点** ●作品の一部は焼き粘土ですので、搬入、搬出は大変です。



彫 塑 「いきたかたち」  
黒崎綾香

**制作意図** ●長い年月が経って作られた巻き貝。その螺旋空間に確かに残っている、生きていた時間と生命感を、鉄の断片をつなぎ合わせることで視覚化しようとしてみました。  
**苦勞した点** ●1枚1枚鉄の断片をつなぎ合わせる中で、サイズや角度を思いどおりにしようとする意識と自分の感覚的な部分を整理して作品に向き合う時間を大切にしました。

現代アート 「自由帳」  
茂木芽衣

**制作意図** ●この作品は「紙のアナログ感」をテーマに制作しました。様々な形をした本を手にとることによって、紙や本に書かれた内容よりも手触りなどの「モノ」としてのおもしろさを感じてもらいたいです。情報が形のない「データ」として扱われる現代だからこそ、形として触れることのできるアナログなものに魅かれます。  
**苦勞した点** ●「ブックデザインの提案」ではないので、あえて機能を持たせないものを作るなど、とにかく頭をやわらかくして取り組むよう心がけました。



彫 塑 「煩惱寺の変」  
小玉理恵

**制作意図** ●「(私を含め)日本人はなぜ信仰を意識せずとも仏像に手を合わせるのか」という疑問から始まりました。仏像自身が持つ強く優しい力を表現したかったので、一人ひとりの仏像をあまり偉そうに言わなそうな親しみやすい表情をつくることを心がけました。仏像制作を通じて私の心も穏やかになればよいと思いましたが、制作中も相変わらず煩惱だらけだったのでこのタイトルをつけました。



デザイン 「R I N」  
鈴木美果

**制作意図** ●木々のシルエットの美しさに魅せられ、その造形をモチーフにテーブルを制作しました。複数のラインの重なりが生み出す様々な表情の面白さ、美しさを追求しています。数学的なルールに基づきながら12本の脚を配置することで、そのひとつひとつを細くすることを実現し、重量感のないフォルムに仕上げました。  
**苦勞した点** ●制作に至るまでの設計の過程や、1つ1つのパーツを磨き上げる作業に多くの時間を費やしました。



彫 塑 「vision #1 #2 #3 #4」  
手塚千晴

**制作意図** ●今までの集大成として、“年輪の再構成”をコンセプトに木彫と向かい合いました。4つの作品にはそれぞれ“沈下”“湧昇”“滞留”“浮游”というテーマがあります。彫刻することによって、木との調和、そして、自己の感情の波を表現しようとした作品です。  
**苦勞した点** ●木の重みを感じさせないような展示を目指しました。

卒業生 10大以上  
**重大News**

平成19年度から22年度の4年間に起こったニュースを紹介し、  
 「もうそんなに経った?」ということから「あった、あった」ということまで、様々な出来事をピックアップ!

- 0 H19年3月  
合格発表  
胴上げされた!?
- 1 H19年4月  
入学式  
朱鷺メッセで開催
- 2 H19年4月  
黎明祭  
いろんな部活やサークルに目移り
- 3 H19年7月  
五十嵐キャンパス内に  
LAWSONオープン!
- 4 H19年10月  
新大祭  
はじめての学園祭
- 5 H19年  
新潟大学ブランドの日本酒  
「新雪物語」完成!
- 6 H19年  
新潟大学独自の学生支援プログラム  
「ダブルホーム」始動!
- 7 H20年1月  
国立大学初! イメージソング  
「耳をすませば」完成
- 8 H20年  
朱鷺の野生復帰を支援!  
「超域朱鷺プロジェクト」発足
- 9 H21年7月  
五十嵐キャンパスで映画の  
ロケが行われ、在学生も出演!
- 10 H21年10月  
創立60周年  
記念事業を開催
- 11 H22年1月  
理学部・井筒助教がおたまじゃくしの尾が  
縮む原因遺伝子を発見!
- 12 H22年2月  
新潟市内で26年ぶりの大雪
- 13 H22年3月  
学生がデザインした新正門完成!
- 14 H22年4月・H23年1月  
アカペラサークル ノーナイズ  
大活躍!

～入学から卒業まで、学生生活で  
 見た、感じた、かけがえのない

時間を振り返って～

# Photo Memory



何もかも初めてに感じた、  
 大学生生活のスタート



学んで、遊んで、悩んで、  
 楽しかった日々



いつもの仲間と何気ない日常を過ごした学舎



それぞれが、それぞれの道のりへ...

新潟大学キャリアセンター

# CANシステム



社会の先輩としてのアドバイスを  
学生にお聞かせ下さい!

『CAN システム』は、在学生が卒業生に就職活動の相談ができ、また卒業生の方からも在学生へ社会の現状や、働くことのやりがいなど、生の声を伝えられるシステムです。先輩からのアドバイスは、厳しい雇用環境の中で不安な気持ちで就職活動に取り組む後輩たちには、心強い支援になります。



卒業生の皆さんには、  
本システムの趣旨をご理解いただき、  
ぜひご登録をお願いします!

■ご登録はとてもカンタン!

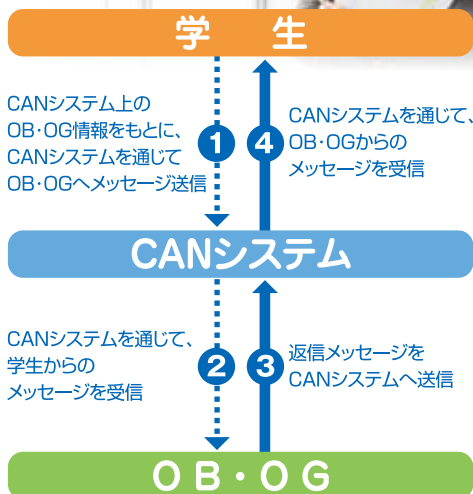
「新潟大学 CANシステム」で検索、または、下記URLからご登録ください。

<http://www.career-center.niigata-u.ac.jp/jobnetwork/>

※システムを経由するので、お互いの個人情報(氏名・メールアドレス等)を公開せずに安心してご利用いただけます。

《お問い合わせ先》新潟大学キャリアセンター TEL:025-262-6087

CANシステムの流れ



編集室  
便り

白衣

- 文系の学生は、大学で何をしてるんだろう?
- 文系の学生は逆のことを考えているのではないですか。
- 「白衣を着る」というのが、理系学生の入門ですよ。
- 確かに、初回の実習で「大学」を実感するというか。
- それで、次第に「普段着」になってきます。さらに目的別に着分けしたりしますよ。
- 私はエプロン代わりに使ってます。
- ジーンズも「作業着」だったから、白衣もその方向へ進むかもしれないね。

おかしら付き

- 「おかしら付き」というのは、「お頭」ではなく「尾頭」だと今年知りました。
- 「お頭」だと忍者集団のヘッドになっちゃうね。
- 鯛に忍者が付いてきたら物騒過ぎて手をつけにくいです。
- そこは忍んで食べてください。
- 鯛を唄ぶんですか?
- 通じてないよ。「尾ヒレ」がつく、なんて言葉もあるよね。
- うわさ話は魚のように広がっていくということでしょうか。
- 水ものってことよ。

【新大広報 Back Number】

[http://www.niigata-u.ac.jp/adm/c\\_forum/index.htm](http://www.niigata-u.ac.jp/adm/c_forum/index.htm)

新大広報のバックナンバーは上記のURLから見るができます。また、学務部学生支援課で受け取ることもできます。

新潟大学ホームページ

<http://www.niigata-u.ac.jp/>

2011年卒業記念号 [No.178]

編集・発行 / 『新大広報』学生編集スタッフ  
新潟大学学務部・新潟大学広報センター  
印刷 / (株)第一印刷所

